

十年ぶりの帯広

福島 みゆき
ふくしま みゆき

今から五十年前、私は帯広の高校を卒業した。父が転勤族だったので二年間しかいなかったが、今も懐かしく強烈に印象に残っている。はじめての北海道は驚くことばかり、とても新鮮だった。真冬には零下三十度にもなり、冷蔵庫の中の方が温度が高いくらいだった。

その前は、富山の一、二を争う進学校にいた。皆に付いていくのが大変だった。必死に勉強しても平均点スレスレということが多かった。休み時間になっても誰一人席を立たず勉強しているのだ。

二年になるととき帯広に転校した。富山に比べるととてもんびりして、おおらかだった。休み時間には誰も教室に残っ

ていなかった。みんな思いつきり遊んでいた。私は、おかげで精神的にとてもラクになったが、なぜか自分の殻を破ることができず、悶々としていた。特に男子とはまったく話せなかった。意識過剰だったのかもしれない。

親しい友人が三人できた。特にYさんとは毎日何時間も議論し合ったものだ。卒業後、彼女は薬剤師になった。私は一浪後上京し、図書館に勤めた。四人で交換ノートを交わしてその後も交流が続いた。Yさんは、家庭の不幸が続き、家族が次々亡くなって天涯孤独となった。そして、彼女も病いを得て五十八で亡くなった。私は親友の早すぎる死に人生観が変

わる程の衝撃を受けた。

葬式はカトリックの教会で盛大に行われた。大きな病院の管理職だったので参列者も多かった。その世話は、従妹や友人たちですべてやった。彼女は、驚く程たくさんの友人に恵まれていたことを知った。

それから十年たち、高校の同期会があるのを機にぜひ帯広に行こうと思った。彼女の墓参りもしたかったのだ。

十年ぶりの帯広は曇っていた。六月の北海道は好天続きと思っていたのに、今年は異常気象らしい。葬儀のとき世話をしてくれた人たちと再会し、墓参りにも一緒に付き合ってもらった。なんと彼らは

毎年命日に必ずお墓に来ていたのだという。

高校の同期会では、一番遠くから参加したという事で、私が乾杯の音頭をとることになった。

「本州の西の果て山口から来ました」と、挨拶した。年齢のせいか大勢の前で話すことが苦にならなくなっている。みんなに恥ずかしがり屋だったのに変わったものだ。変わったといえ、男子ともビックリする程よく話せた。二次会では、各自自分の卒業してからの五十年の人生を語り出したので時は尽きなかった。

たくさんの思い出を胸に詰めこんで帰ってきた。あんまり感激したせいか、その後心臓に疾患がみつきり、静養することになった。今は畑仕事したり普通の生活をおくっているが、ほとんどの習い事、ボランティアの活動は止めてしまった。

その後、Yさんの遺骨を教会の都合で散骨することになったと聞いた。私は八月のその日その時刻に山口から帯広に向かって黙祷した。すぐ友人たちがそのときの映像をメールで送ってくれた。



同期会で会った男子の人たちとは文通がはじまった。思いがけない五十年後の展開に驚きながらもワクワクしているところである。

終活しなければと思っているのに、まだまだ現役の気持ちも失っていないらしい。

